

「キバナヤマオダマキの種採り」

私の山荘は大阪万博の頃に建ったボロ小屋ですが、敷地だけはやたらと広く、いろいろな山野草が自生しています。樹木も多いので、虫や小動物、鳥類が繁殖しています。小さいながら、一つの生態系を形成しているとも言えます。この夏、草刈をしようとして、裏の森にオダマキの大群落を発見しました。咲いていたのは、キバナヤマオダマキ(黄花山苧環)という種類で、いかにも山の植物らしい、かわいらしい花を咲かせます。私はその群落の周囲をロープで囲って、「保護地区」に指定しました。そのキバナヤマオダマキが、今たくさんの種子をつけています。

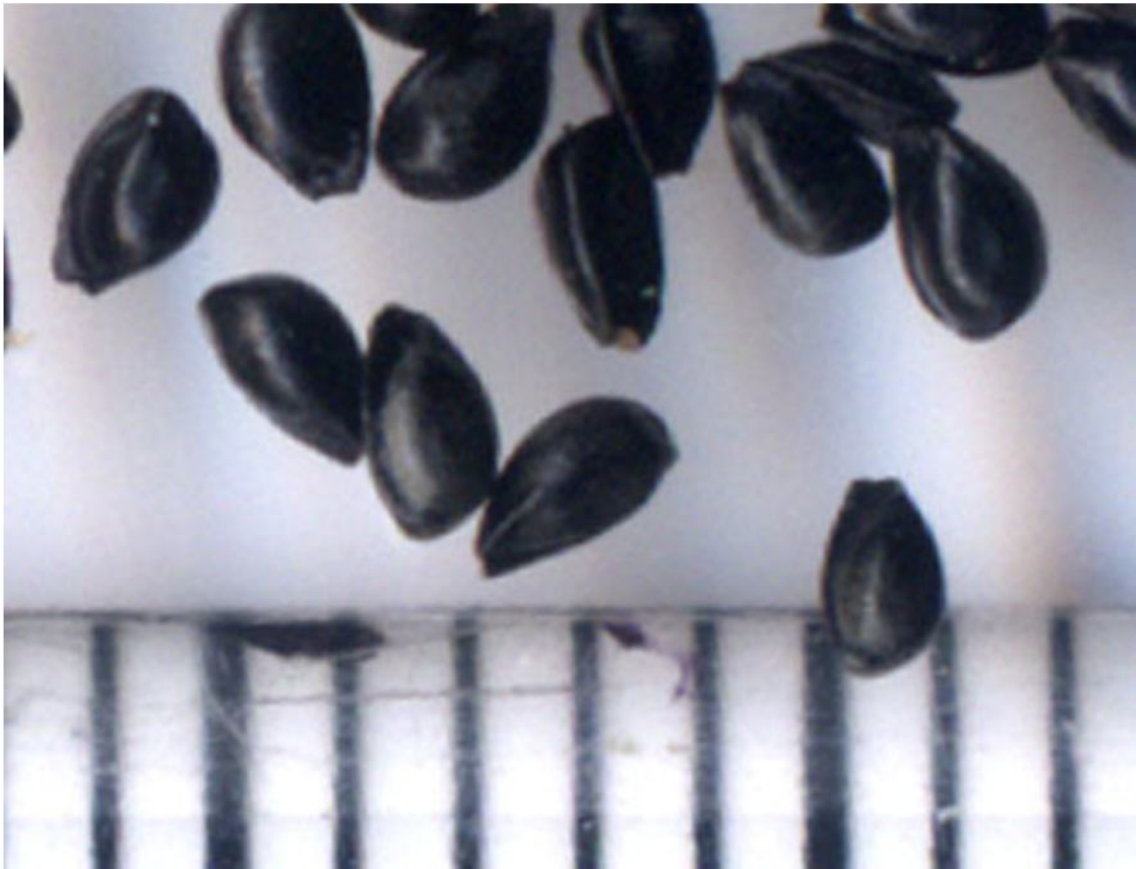


「キバナヤマオダマキ」*Aquilegia buergeriana* var. *buergeriana* f. *flavescens*
左が咲き残った花。右が果実(鞆)です。学名の「var」はバリエーションの略で、ヤマオダマキの変種を意味します。この変種の学名記載は、牧野博士によるものです。9月中旬・北軽井沢

花は、レンゲショウマと同じように下向きに咲きますが、果実は上を向いています。果実は「袋果(たいか)」と呼ばれる鞆状のもので、その中に黒い小さな種子がたくさん入っています。種子は同時にまき散ることはなく、鞆の上部から少しずつ開いていって、動物とぶつかる振動や風で、少しずつ拡散する仕組みになっています。キバナヤマオダマキはもともと宿根草(多年草)なので、種子を拡散しなくても絶えることはありません。しかし、動物が通る時に触れて、種を遠くまで運んでもらうのでしょう。実際に周囲には、イノシシがミミズを探すために掘った穴が、無数にありました。



「キバナヤマオダマキの袋果」 細毛あって、種子を保持しています。鞘の中には黒い小さな種子がびっしり入っていますが、少し振ったぐらいでは全部は出ません。



「キバナヤマオダマキの種子」
大きさ 1mm ほどで、「黒ゴマ」とそっくりです。小さいので、集めるのは大変です。

このあたりは、12月下旬から4月上旬まで雪に覆われます。今年の2月には1m40cmも積もりました。この種子もいずれは雪に埋もれて、そのまま冬を越すのでしょうか。その前にほとんどは野鳥の餌になってしまうかも知れません。その前に「収穫」することにしました。

友人家族が泊まりに来ていたので、朝食後に「キバナヤマオダマキの種子収穫大会」を実施しました。鞆を逆さにして袋の上でゆさぶると、簡単に種子が落ちてきます。しかし、全部落ちるわけではなく、必ず鞆の中に半分ぐらい残ります。それは自然拡散用、野鳥の餌用ですね。



「キバナヤマオダマキの種子収穫」

4人で30分間の収穫です。ざっと数千粒あります。たぶんどこにも売っていない貴重品です。山野草に興味がある方には差し上げますので、メールでお知らせください。

(お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋)